

巻頭言

甲南大学教育学習支援センター所長 高 龍 秀

中央教育審議会大学分科会は2020年1月22日に、「教学マネジメント指針」をまとめ公表した。この指針では、「予測困難な時代を生き抜く自律的な学修者を育成するためには、学修者本位の教育への転換が必要」との認識の下に、この転換のために「教育組織としての大学が教学マネジメントという考え方を重視していく必要」があるとしている。そして、「教学マネジメント」を「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営であり、大学の内部質保証の確立にも密接に関わる重要な営み」と位置付けている。

本指針の概要を以下に示したい。大学においては三つの方針を土台にして、大学全体レベル、学位プログラムレベル、授業科目レベルという三つのレベルで、教育目的を達成するためにPDCAを継続しなければならない。第1に、大学全体レベル及び学位プログラムレベルにおいて、卒業生が「何を学び、身に付けることができるのか」を明らかにした学修目標を卒業認定・学位授与方針（DP）などで明確にする必要がある。第2に、DPで示された学修目標を達成する観点からは、明確な到達目標を有する個々の授業科目が学位プログラムを支える構造となるように、体系的かつ組織的な教育課程が編成される必要がある。この教育課程の編成・実施に関しても上記の3つのレベルでの実践と検証が必要となる。その際に授業科目レベルでは、大学及び学位プログラムレベルでの学修目標を支える形でその科目の到達目標を明確に示し、成績評価基準など共にシラバスに示さなければならない。第3に、学修成果・教育成果の把握・可視化を3つのレベルで行わなければならない。その前提として、各科目の成績評価を厳格に実施し、GPAなどにより、大学全体レベル、学位プログラムレベルで学修成果を把握し検証しなければならない。本学では学修ポートフォリオを通じて学生自身が自らの学修成果を把握ししっかり振り返りが行えるようにしている。さらに学修ポートフォリオに示された学修度を学位プログラム単位や大学全体で集計することでそのレベルでの把握と検証が可能となっている。授業科目レベルで考えると、各授業科目の到達目標について、ルーブリック等を用いてその具体的な達成水準を事前に開示することは、厳格な成績評価の実施や学生の学修意欲の向上の観点からも有効と考えられる。また、学修者本位の教育への質的転換のためにも、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーはもとより、科目ナンバリングや学生の能動的学習を効果的に実施することが必要になっている。

本紀要では、様々な教員による教育実践、能動的学習の事例紹介などに関する研究成果が掲載されている。本紀要を通じて、甲南大学らしい多様な教育活動実践の経験交流が活性化され、本学の教育力の向上に寄与することを期待している。